



Title	現代ドイツの囲碁事情 (1)
Author(s)	杉浦, 康則
Citation	独語独文学研究年報, 45, 1-25
Issue Date	2019-06
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74960
Type	bulletin (article)
File Information	45_01_sugiura.pdf



[Instructions for use](#)

現代ドイツの囲碁事情(1)

杉浦康則

はじめに

ドイツ碁連盟 (Deutscher Go-Bund) の機関紙『ドイツ碁新聞』(Deutsche Go-Zeitung) 2004 年第 4 号に、興味深い情報が掲載された。同年 4 月、18 歳以上の 812 人を対象にゲームの知名度に関する電話アンケートが行われ、その結果、チェス、ミューレあるいはゲームは 95% 以上に知られているが、囲碁は約 23% に知られるのみであるということが示されたのである。また、囲碁に関するより詳細なデータに目を向けると、囲碁について聞き知っている者は 13.8%、囲碁を見たことがある者は 4.2%、既に一度囲碁を打ったことがある者は 4.3%、時々囲碁を打つ者は 1.1% であり、これらを全て合わせると 23.4%、残りの 76.6% はそもそも囲碁を知らないという結果であった。そして、この結果と 18 歳以上の人口約 7000 万人という数値から、時々囲碁を打つドイツ人プレーヤーは約 75 万人と推定された¹。

この 75 万という数値は驚きであった。なぜならインターネット上では、ドイツの囲碁人口はそれよりもかなり少なく見積もられていたからである²。また、おそらくドイツ碁連盟の構成員たちも驚いたに違いない。なぜならドイツ碁連盟ホームページのフォーラムでの討論において、ドイツの囲碁人口は数万人程度と推定されていたからである³。推定をはるかに上回る数値、しかも囲碁の知名度が約 23% でしかない国においてこれほどの囲碁プレーヤーたちが存在するという『ドイツ碁新聞』の調査結果は、囲碁がチェス並みの知名度を獲得すれば、ドイツにおける囲碁人口が一気に膨れ上がるのではないかという期待を呼び起こしたことだろう。

この記事が掲載されてから 10 年以上を経た 2016 年、囲碁の世界チャンピオンであるイ・セドル (李世乭 1983-) とコンピューター囲碁プログラムのアルファ碁 (AlphaGo) の対局が世界中で注目を集めた。その際、ドイツにおいても囲碁の知名度は上昇したに違いない。『ドイツ碁新聞』2016 年第 5 号でも「どれくらい多くの囲碁プレーヤーが存在するのか？」

¹ Reiner Grootenhuys: *Bekanntheitsanalyse Go 2004*. In: *Deutsche Go-Zeitung* (2004), Heft 4, S.38-39, hier S.38. このアンケート調査は、マンハイムのマネージメント・コンサルト (Management Consult) によって行われた。より詳細なアンケート結果は次のアドレスで閲覧することができる。 <http://www.dgob.de/down/mc-studie.ppt>

² 日本棋院のサイトにおいても、ドイツの囲碁人口は 5 万人程度と推定されている。Vgl. <http://archive.nihonkiin.or.jp/juniorclub/worldgo/index.htm> ただし囲碁人口算出の際、どれほどの頻度で囲碁を打つ者が囲碁プレーヤーの 1 人としてカウントされるのかは不明確である。

³ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=779.0> (20), *Zahl der Go-Interessierten*, Joachim Beggerow, 14.07.2004 10:27; Ebd., Hans S., 14.07.2004 11:37; Ebd., Alfred Ebert, 14.07.2004 12:18. フォーラムでの討論を文献として注に挙げる際の形式については、次の文献を参照。杉浦康則：ドイツ囲碁史研究 (1) [『独語独文学研究年報』第 44 号, 2018 年, 127 ~142 頁] 128 頁。

と題された記事において、上述のアンケート回答者たちの4分の3が囲碁を全く知らなかったという状況は、とりわけアルファ碁についての報道によっていくらか改善されたと推測されている⁴。したがって、ドイツの囲碁が好況を迎える日、そしてドイツの囲碁人口の急激な増加が報告される日も近付いているのかもしれない。

このように今後の発展が期待されるドイツの囲碁の状況に対して、私は「ドイツ囲碁史研究(1)」において、既に21世紀初頭からドイツ囲碁界にポジティブな変化が訪れていたことを報告した⁵。そして、何がドイツの囲碁にこのような変化をもたらしたのか、その変化からどのような活動が生み出されたのか、それらの活動はその後どのような展開を迎えるのかという問題点の究明を研究目標として掲げ、ドイツ囲碁史の黎明期からの概観に焦点を当てた。これに対して「現代ドイツの囲碁事情」においては、21世紀初頭のドイツ囲碁界の好況に注目することから論述を開始する。

21世紀初頭のドイツ囲碁界の発展は、インターネット対局による碁ブンデスリーガ(Go-Bundesliga)の発足という形で明確に表れた。2004年11月、ドイツ碁ブンデスリーガの初シーズンが開幕したが、このリーグ創設に向けて、ブンデスリーガ専門事務局長の大役を引き受けたのはトリーアのハンス＝ユルゲン・コッホ(Hans-Jürgen Koch)であった。彼の尽力によってブンデスリーガの規則が起草され、『ドイツ碁新聞』2004年第4号に次のような記事が掲載された：

ドイツ碁連盟ウェブサイトの討論フォーラムでの提案後、前回のドイツ碁連盟の代表者会議において囲碁リーグの導入が決議された。競技指導者として私、ハンス＝ユルゲン・コッホが指名された。この数週間で私はシステムを仕上げた。[...] リーガは3階級に区分されている。ブンデスリーガ、第2ブンデスリーガ、そしてインターネットリーグである。[...] 完全版大会規則はブンデスリーガのサイトで閲覧可能となる。1チームは4人のレギュラーメンバー及び4人の補欠メンバーで構成される。[...] 第1ブンデスリーガは8チームで構成される。これらのチームは、決められた期日にKGSサーバー上で総当たり戦を行う。それに引き続き、上位4チームと下位4チームがまとめられる。これらの4チームのグループが週末に、適時に公表される対局地で[...] リーガマイスターまたは降格チームを争う。[...] 第2ブンデスリーガは参加チームの数次第で、2から3のグループで構成される。それぞれのリーグが同様に8チームで構成され、第1ブンデスリーガと同じ原則に従って対局を行う。リーグマイスターは第1ブンデスリーガに昇格し、1から2チームがインターネットリーグに降格する。[...] インターネットリーグは残りのチームで構成され、KGSサーバー上で9ラウンドのスイス

⁴ Marc Oliver Rieger: *Wie viele Go-Spieler gibt es?* In: *Deutsche Go-Zeitung* (2016), Heft5, S.5.

⁵ 杉浦, 127~131頁.

式トーナメントを行う。上位2から6チームが第2ブンデスリーガに昇格する。⁶

その後、『ドイツ碁新聞』2004年第6号には、各リーグで第1ラウンドが終了した時点での報告が掲載され、翌年6月のポツダム広場での決勝ラウンド開催の可能性も言及された。そして36チーム、260人以上のプレーヤーという多大なブンデスリーガ参加者数が誇らしげに告げられたのである⁷。

『ドイツ碁新聞』に掲載されたこれらの記事を見る限り、碁ブンデスリーガの初シーズンは順調な滑り出しを迎えたかのように思われる。しかし、実際にはその準備段階においていくつかの問題を抱えながらのスタートであり、開幕前からドイツ碁連盟ホームページのフォーラムにおいて激しい討論が展開されていた。そして、手探りで経過したブンデスリーガの初年度は、その閉幕の際にも困難に見舞われることとなった。この状況に関して2005年6月24日、ディルク・バッテンフェルト (Dirk Battenfeld) は「カールスルーエ」というタイトルのスレッドにおいて、ブンデスリーガ初年度の経過を調査することになる後世の歴史家が、事態の成り行きを知った際にどのように反応するかを次のように危惧した：

私はまさに驚く観察者たちを想像する。裏事情を完全に暴き出すために、もし彼らが時代の証人から説明を受け、歴史家たちがこのフォーラムに保管されている文書を掘り進むなら、まず彼らの驚きがどれほど大きいだらうか。⁸

⁶ Hans-Jürgen Koch: *Die Go-Bundesliga kommt*. In: *Deutsche Go-Zeitung* (2004), Heft4, S.4-5, hier S.4. なお、代表者会議 (Delegiertenversammlung) については、社団法人ドイツ碁連盟の規約 (Satzung des Deutschen Go-Bunds e.V.) において次のように規定されている。「会長は少なくとも年に一度、通常会員、全幹部及び専門事務局を文書によって [...] 定例代表者会議に招く。[...] 通常会員の少なくとも4分の1、あるいは全幹部が召集を文書で要求ないし決定した場合にも、代表者会議は [...] 会長によって [...] 召集されなくてはならない」。通常会員 (Regelmitglied) とは各州連盟のことであり、各州連盟は代表者会議に向けて代表を3人まで派遣することができる。幹部 (Vorstand) は会長、会計主任、書記等から構成される。また、専門事務局 (Fachsekretariat) については次のように規定されている。「全幹部の負担を軽くするために、会長は専門事務局を作り、特定分野の任務を事務局自らの責任で遂行するよう委ねることができる。各専門事務局を一人の事務局長が統轄する。」 Vgl. <http://www.dgob.de/> KGS (Kiseido Go Server) については次の文献を参照。杉浦, 129~130頁。

また、『ドイツ碁新聞』2004年第4号にはさらに次のような公示も掲載された。「碁ブンデスリーガ2004/5の公示。対局：KGSサーバー上での4人制チーム対局で、ライブ決勝ラウンドを伴う。方法：3リーグ、棋力によって区分される。方式：60分+秒読み(10分以内に15子)、コミ6目、日本式ルール。開始：10月4日。2005年4/5月に終了。参加費：第1及び第2ブンデスリーガは各チーム30ユーロ、インターネットリーグは各チーム15ユーロ。」 Vgl. *Deutsche Go-Zeitung* (2004), Heft4, S.7. ライブ決勝ラウンド (Live Endrunde) とはインターネット上での対局ではなく、実物の碁盤や碁石を用いて行われる対面対局による決勝ラウンドのことであり、オフライン決勝ラウンド (Offline Endrunde) とも呼ばれている。後述の通り、ライブ決勝ラウンドはブンデスリーガ創設時の討論において論点の1つとなった。

⁷ Hans-Jürgen Koch: *Die Go-Bundesliga ist gestartet*. In: *Deutsche Go-Zeitung* (2004), Heft6, S.5-6, hier S.5.

⁸ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1576.0> (60), *Karlsruhe*, Dirk Battenfeld,

本稿においては、ここで述べられた「フォーラムに保管されている文書を掘り進む」という作業が当面の課題となる。実は、初年度の碁ブンデスリーガの経過を辿ることはドイツ現代囲碁史研究における急務と言える。なぜなら、碁ブンデスリーガの開幕から十数年を経た2016年の時点で、ブンデスリーガ初年度の経過を解明することは「時代の証人」たちにすら容易でないことが、スレッド上での討論に示されているからである⁹。そこで本稿では、2004年から2005年にかけてのスレッド上での討論を手掛かりとして、ブンデスリーガ創設からその初年度の終わりまでの経過を辿り、これをドイツ現代囲碁史研究の初手とした。

1. ブンデスリーガ創設の提案

2004年5月24日、フランツ＝ヨーゼフ・ディックフート (Franz-Josef Dickhut)¹⁰がドイツ碁連盟のフォーラムにおいて「碁ブンデスリーガ?」というタイトルのスレッドを作成し、次のような問いを投げかけた：

KGS 上での興味深いベルリン対ハンブルク都市対抗戦及び中国と韓国のプロチームリーグから、ドイツでも碁ブンデスリーガのようなものを開催できないかと、最近私は度々考えた。[...] ふさわしい「ブンデスリーガ」とはどのようなものだと君達は思うだろうか。¹¹

24.06.2005 10:12.

⁹ 2013年1月23日、マルティン・シュティアスニー (Martin Stiassny) が「永遠のブンデスリーガ順位表」というスレッドにおいて次のように述べた。「カールスルーエは2010年夏までの最初の6シーズンに参加した。第1シーズンはインターネット上に記録されておらず、第2シーズン(2005/2006)以降のブンデスリーガの結果をブンデスリーガマネージャーに見つけ、読み返すことができる。」Vgl. <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=3028.0> (20), *Ewige Bundesliga-Tabelle*, Martin Stiassny, 23.01.2013 15:47. これに対して、3年以上を経た2016年6月9日、クラウス・ペトリ (Klaus Petri) が次のような問いを投げかけた。「私は記録されていない第1シーズンについて知りたい。どのようなチームが参加していたか、まだだれか覚えているだろうか。今日と同じように10チームだったのか。」Vgl. Ebd., Klaus Petri, 9.06.2016 09:31. この問いに対して、複数の異なる返答が投稿された。Vgl. Ebd., HanGoLei, 9.06.2016 14:30; Ebd., Ralf Schönfeld, 9.06.2016 15:00; Ebd., Striker, 9.06.2016 17:29. ブンデスリーガマネージャー (Bundesliga-Manager) とはドイツ碁連盟ホームページ内のサイトの1つであり、そこではシュティアスニーが指摘している通り、第2シーズン以降のブンデスリーガの結果を確認することができる。Vgl. <http://dgob.de/>

¹⁰ ディックフートは1994年から2013年の間に6回、世界アマチュア囲碁選手権にドイツ代表として出場しており、とりわけ2005年には5位という成績を残している。

¹¹ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=648.0> (200), *Go Bundesliga?*, FJ, 24.05.2004 19:48. 2004年3月25日からベルリンとハンブルクの囲碁プレーヤーたちは、KGSにおいて都市対抗戦を行っていた。両都市からそれぞれ10人のプレーヤーが代表に選ばれ、まず両チームの10番手のプレーヤー同士が対局。続いてこの対局の勝者が相手チームの9番手のプレーヤーと対局するという形で試合は進行し、2004年9月23日、ベルリンの2番手カーステン・リーボルト (Carsten Liebold) がハンブルクの1番手エクベルト・リットナー (Egbert Rittner) を

ディックフートはこの問いかけに続けて、自らが思い描くリーグについて簡単に説明している。彼はリーグに参加するチームとして、地域や州、あるいは都市を代表する6から8チームを想定した。各チームは4あるいは6人のプレーヤーと少なくとも2、3人の補欠プレーヤーで構成され、参加するために必要な棋力は少なくとも三段（補欠プレーヤーは少なくとも二段）、対局は KGS 上で行い、場合によっては最終ラウンドを対面対局で行うというのが彼の提案であった¹²。

この提案に対して様々な観点から意見が投げかけられ、その中でも大きな論点となったのは対局を KGS 上で行うか、対面対局で行うかという点であった。2004年5月25日、ドイツ碁連盟次期会長候補となっていたベルンハルト・クラフト (Bernhard Kraft) は、ディックフートのブンデスリーグ構想に賛成する中で、KGS での対局について次のような見解を示した：

非常に良いアイデアだ。ベルリン対ハンブルク都市対抗戦は、これまでのドイツの大会で最大の観戦者を伴う囲碁の大会だ。このようなことはもちろん KGS によって初めて可能となった。郷土愛が大きなモチベーションの要因であるように思われる。もはやあまり活動的ではない強いプレーヤーたちが再び競技会に関心を持つことができたということは、特別な成果である。これらのプレーヤーたちが対面式の大会にも再び現れるならば、もちろん私にはより良いのではあるが。ただ私は、KGS には常に潜在的な公正さの問題があることを指摘したい。¹³

クラフトが述べた「もはやあまり活動的ではない強いプレーヤーたち」というのは、対局会場を訪れることが金銭的、時間的、体力的に困難なプレーヤーたちのことであり、彼の意見には現地へ赴くための旅行の負担が考慮されている。この点に関して、アンドレアス・テッケントループ (Andreas Teckentrup) も同日 13時56分、インターネットより旅行を大きな問題と捉える者たちがいるだろうことを指摘した¹⁴。また同日 14時17分には、インターネット対局と対面対局を組み合わせるという提案が投稿された。この組み合わせの利点として、ベルリン対ハンブルク都市対抗戦のように、KGS によってより多くの観戦者を集められること、対面対局では不誠実なチームも不正を行うことができないこと、年1回の対面対局ならば旅行もそれほど大きな問題とはならないこと等が挙げられた¹⁵。

このように KGS での対局に賛同する意見に対して、同日 22時12分、ブンデスリーグ専

破り、ベルリンの勝利となった。Vgl. <http://www.dgob.de/index.htm?news/vergleichskampf.htm>
¹² <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=648.0> (200), *Go Bundesliga?*, FJ, 24.05.2004 19:48.

¹³ Ebd., kraft, 25.05.2004 09:41.

¹⁴ Ebd., Andreas, 25.05.2004 13:56.

¹⁵ Ebd., Thomas, 25.05.2004 14:17.

門事務局長のコッホはインターネット上でのブンデスリーガ対局に否定的な意見を述べた。彼は、インターネット上でブンデスリーガが開催された場合、それが陳腐なものになってしまうのではないかとこの点を危惧したのである¹⁶。しかし、対面対局の実施を主張するこのコッホの意見に反対し、KGSでの対局を支持する意見が続いた。同日 22 時 30 分、ミハエル・ゲッツェ (Michael Goetze) は KGS によってより多くのプレーヤーのブンデスリーガ参加が可能となるうえ、より多くの観戦者を獲得できると主張し¹⁷、また同日 22 時 34 分には、年に数回、週末を高速道路で半日間過ごさなくてはならないのであれば、ブンデスリーガに参加しようという気持ちは弱まる、という意見も投げかけられた¹⁸。そして同日 22 時 50 分、ディックフートも「上述の、少なくとも部分的にオンラインで行われるリーガの利点に、私は同調することができる」と主張した。彼は交通費、移動時間、そして肉体的辛労をプレーヤーたちのみならず観客たちにまで要求することはできないと考えたのである¹⁹。

その後も対面対局への批判は続いたが、2004 年 5 月 26 日、「1 ラウンドをオフラインで対局するだけでも十分に困難だろう」という理由から、志願するチームのみによるオフラインラウンドがクラブトによって提案されたのを最後に、対局の場を KGS にするかどうかについての討論は一段落し、新たなスレッドでの議論再開を待つこととなった²⁰。

この論点に並び、プレーヤーの居住地域による参加資格の制限も大きな論点となった。2004 年 5 月 25 日、コッホがブンデスリーガへの参加資格について次のように提案した：

参加してよい者と参加してはいけない者 (外国人規制) という趣旨で、あまりにも厳しくチームを制限しないこと。ヨーロッパはますます広大に共に成長しているので、これらのプレーヤーたちを包み込むことも意味深い。²¹

この主張には、ドイツ以外の国々からの参加者も視野に入れていることが明確に示され

¹⁶ Ebd., Maligar, 25.05.2004 22:12. マリガー (Maligar) とは、スレッド上でのコッホのペンネームである。

¹⁷ Ebd., Michael Goetze, 25.05.2004 22:30.

¹⁸ Ebd., varg, 25.05.2004 22:34.

¹⁹ Ebd., FJ, 25.05.2004 22:50.

²⁰ Ebd., kraft, 26.05.2004 11:06. この討論に並行して 2004 年 5 月 26 日、ディックフートが「ブンデスリーガ・アンケート 1」というスレッドを作成し、「ブンデスリーガが催されるのであればどこで実施されるべきだろう」という問いを投げかけた。アンケートの結果は次の通り。

- | | |
|----------------------|--------------|
| ・ オフラインのみで対局 | 5 票 (10.4%) |
| ・ KGS 上のみで対局 | 12 票 (25%) |
| ・ 他のサーバー上ではなぜいけないのか | 2 票 (4.2%) |
| ・ オンラインとオフラインを組み合わせる | 29 票 (60.4%) |

合計 48 票。Vgl. <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=651.0>, *Bundesliga-Umfrage I*, FJ, 26.05.2004 08:44.

²¹ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=648.0> (200), *Go Bundesliga?*, Maligar, 25.05.2004 13:53.

ている。この主張に続き、ドイツ以外の国々を視野に入れているかは不明確であるものの、同日 18 時 58 分、ベルント・コルビンガー (Bernd Kolbinger) が「トップチームを用意するために、その地域に住んでいないプレーヤーたちもチームに受け入れられるべきだろう」²²という意見を述べている。居住地域による制限を厳しくしないことを望む点においてはコッホと同じである。また、ベルント・グラムリッヒ (Bernd Gramlich) は 2004 年 5 月 28 日、「このリーグが [ドイツ基連盟] 構成員たちのみに開かれているべきか、それとも非構成員たちも対局に参加してよいのかということが、もちろん中心的問題だ」²³と述べ、参加資格規制の基準として新たな視点が投げかけられた。この点に関して同日 16 時 20 分、コルビンガーが「私は非構成員たちも許可するだろう」と返答した。彼にとって重要なのは「トップグループのレベルができるだけ高く、魅力的であること」であった²⁴。そしてこの参加資格のテーマに関して 2004 年 6 月 1 日、グラムリッヒが新たに次のような意見を述べた：

本件を第 1 シーズンにおいてはブンデスリーグではなくインターネットリーグ (あるいはそれに似た名称) と名付け、オーストリアの人々、ルクセンブルクの人々を招待しなさい。彼らの中には [...] はドイツの第 1 基盤をそれほど退屈させないプレーヤーも何人かいる。²⁵

このグラムリッヒの意見によって、ドイツ人以外のプレーヤーたちに明確に視点が向けられ、さらに 2004 年 6 月 8 日にはコルビンガーが次のような主張を展開した：

なぜ参加条件をできるだけ寛容なものにすることで [...] 国際性を取り入れないのか。私はドイツに住んでいないプレーヤーたちを許可することさえ想像することができる。[...] 次のような割合を導入することもできるだろう。： 2 人のプレーヤーはドイツ基連盟構成員でなくてはならず、3 人目はドイツに住んでおり、4 人目は例えば北京に住んでいるがドレスデンのために出場する。強いプレーヤーたちがより多く参加すればそれだけ観客の関心も高まり、より多くの強いドイツ人プレーヤーたちが参加する。²⁶

連盟構成員以外、そしてドイツに居住していない者にさえも参加を認めようとするこれらの意見に対して、それを拒絶する意見も投げかけられた。クリストーフ・ゲルラッハ

²² Ebd., kolben, 25.05.2004 18:58. ベルリン対ハンブルク都市対抗戦が多くの観戦者を獲得できたのは、それがドイツのトッププレーヤーたちによるものだったからであるとコルビンガーは考えており、彼の意見は観戦者獲得も考慮したものであった。Vgl. Ebd., kolben, 25.05.2004 20:32.

²³ Ebd., Bernd Gramlich, 28.05.2004 15:40.

²⁴ Ebd., kolben, 28.05.2004 16:20.

²⁵ Ebd., Bernd Gramlich, 1.06.2004 15:51. 第 1 基盤には各チームで最も強いプレーヤーが配置され、エース対決が行われる。

²⁶ Ebd., kolben, 8.06.2004 16:35.

(Christoph Gerlach) ²⁷は同日 17 時 22 分、次のように述べている：

碁ブンデスリーガを構成員でない者たちにも開放することが強く望まれているのであれば、きっとその組織もドイツ碁連盟の外部に、つまり例えば個人的なインターネットサイト上になくてもはならないだろう。構成員でない者たちの許可を、私は個人的に不要だと思う。「碁ブンデスリーガ」という称号の下では、ドイツのチームのみに出場資格があることが期待されるだろう。²⁸

この主張に対して 2004 年 6 月 10 日、当時の連盟会長マルティン・シュティアスニー (Martin Stiassny) がスレッドに自らの意見を投稿した。シュティアスニーは次のようにゲルラッハの意見には反対の立場であった：

私は [...] ドイツ碁連盟/州連盟構成員であることを決定的な基準としては見ないだろう。できる限り多くの外国人プレーヤーたちを私たちの囲碁グループに統合するために、このチームリーグを利用することの方が私にはずっと重要である。²⁹

このように、対局方法と参加資格についての討論が中心となる中で³⁰、ブンデスリーガのタイトル獲得チームを決定するための方法として、このスレッドにおいて既にプレイオフが提案されていたことを最後に指摘しておきたい。上述の通り、ディックフートは当初の提案において、場合によっては最終ラウンドを対面対局で行うと述べていたが、2004 年 6 月 9 日、リーグの最終ラウンドではなく、リーグ対局後のプレイオフを対面対局で行うという案が投稿された³¹。また同日 16 時 3 分、クラフトはプレーヤーたちが望む場合のみ、オフ

²⁷ ゲルラッハは 1993 年から 2010 年の間に 4 回、世界アマチュア囲碁選手権にドイツ代表として出場している。また、彼はヒカルの碁専門事務局の局長である。ヒカルの碁専門事務局については「現代ドイツの囲碁事情 (2)」において叙述する予定である。

²⁸ Ebd., Christoph Gerlach, 8.06.2004 17:22.

²⁹ Ebd., Martin Stiassny, 10.06.2004 19:39.

³⁰ この討論に並行して 2004 年 5 月 26 日、ゲッツェが「ブンデスリーガ・アンケート 4」というスレッドを作成し、「ブンデスリーガチームはどのように構成されるべきか」という問いを投げかけた。アンケートの結果は次の通り。

- ・全プレーヤーたちが明確に同一都市の出身であるべき。5 票 (11.4%)
- ・チームはある都市/地域に結び付けられているべきだが、チームごとに 1 人の外国人プレーヤーなら OK。12 票 (27.3%)
- ・チームは特定の都市/地域を代表するべきだが、誰が実際に参加するかについては大目に見るべき。18 票 (40.9%)
- ・ドイツの全く異なる 4 地域出身のプレーヤーたちがチーム結成に向けて提携を望むなら、それで OK。8 票 (18.2%)
- ・どうでもいい。六段/七段が 2 人以上いるチームはそもそも存在しない。1 票 (2.3%)

合計 44 票。Vgl. <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=663.0>, *Bundesliga-Umfrage IV*, Michael Goetze, 26.05.2004 17:27.

³¹ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=648.0> (200), *Go Bundesliga?*, Till, 9.06.2004 14:04.

ラインラウンドを行うという提案をしている³²。最終的に対面対局の決勝ラウンドを行うかどうかという論点は、ドイツ以外の国々からの参加を許可するかどうかという論点と並び、後のスレッドにおいてとりわけ大きな問題となった。つまり、ブンデスリーガ初シーズンの苦難となる問題は、既にディックフートがブンデスリーガの創設を呼びかけたスレッドに登場していたのである。

2. 迫るブンデスリーガ開幕

2004年7月15日、ドイツ碁連盟ホームページのフォーラムに「幹部通達 2004年6/7月」が掲載された³³。この通達においてはまず、6月26/27日にフランクフルトで行われた代表者会議において、シュティアスニーに代わりドイツ碁連盟の新会長としてクラフトが選出されたことが報告され、続いて連盟の専門事務局における変更が伝えられた。その中で、新たにブンデスリーガ専門事務局が作られ、その局長がコッホによって担当される旨も述べられた。彼によって大会規則が起草されたこと、そして、彼がライブ決勝ラウンドを行うようブンデスリーガを方向付けていたことは、本稿冒頭で引用した『ドイツ碁新聞』2004年第4号に示されている通りである。

このようにしてブンデスリーガ創設に向けた準備が少しずつ進行し、開幕が迫ってきた2004年8月29日、「碁ブンデスリーガ — 君たちの質問はここで回答される...」³⁴というスレッドがコッホによって作られた。このスレッドにおいても、複数のテーマに関する討論が並行して進められる中、2004年9月20日には『ドイツ碁新聞』編集者のトビアス・ベルベン (Tobias Berben) が対面対局による決勝ラウンドについての意見を述べている。それは、インターネット対局で獲得したポイントが決勝ラウンドに持ち込まれるという大会規則に対する批判であった。ベルベンは、リーグ対局時のポイントを決勝ラウンドでは無効とすることによって、対面対局のために直接集まることの価値が高まると主張し、さらに次のように述べたのである：

そのうえ、全てのインターネット不正疑惑がはっきり晴らされるだろう。後にライブで無力をさらけ出すのなら、なぜインターネットで不正をするだろうか。そしてチームのプレーヤーたちもルーマニア、中国、日本、韓国あるいはその他のどこかからではなく、実際にそれぞれの都市/地域の出身となるだろう。³⁵

³² Ebd., kraft, 9.06.2004 16:03.

³³ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=783.0>, *Vorstandsrundschreiben 06-07/2004*, DGoB-Vorstand, 15.07.2004 19:28.

³⁴ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=912.0> (420), *Go-Bundesliga - eure Fragen werden hier beantwortet...*, Maligar, 29.08.2004 22:20.

³⁵ Ebd., Tobias Berben, 20.09.2004 00:51. このベルベンの投稿からは、この時点では決勝ラウンドとして4チームによる総当たり戦という形式が想定されていたこともわかる。

そもそもベルベンの主張は、上述の通り、リーグ対局時に獲得したポイントの扱いを起点としていた。ところが「プレーヤーたちも […] 実際にそれぞれの都市／地域の出身となるだろう」という彼の主張をきっかけとして、外国人規制についての討論が再開されることとなった。同日 7 時 3 分、グラムリッヒがベルベンに向けて「サッカーのブンデスリーグは『外国人プレーヤーたち』なしでは価値が半分しかないだろう」という意見を述べ³⁶、これに対してベルベンは同日 11 時 17 分、次のように反論した。

[サッカーの]ブンデスリーグの外国人プレーヤーたちは、少なくとも彼らがプレイするクラブの所在地に住んでいる。東京あるいは北京に住むプレーヤーたちをブンデスリーグに出場させるという、うわさで私の耳に届いた計画を、私は全く評価しない。³⁷

このベルベンの主張に対して、コッホは同日 11 時 23 分、「プレーヤーたちがどこの出身かは […] 各チームリーダーに委ねられている」と述べた。彼の考えでは、タイトル獲得のために対面対局での決勝ラウンドで勝利しなくてはならないということが既に、外国人プレーヤーの編成制限となっていたのである³⁸。また、同日 13 時 59 分にはゲルラッハもこの討論に加わり、「特殊な事例」という観点から次のような意見を述べた：

私は外国人プレーヤーたちに反対だ。しかしまた、ハノーファーには特殊な事例がある。チェ・ヨンイル（三段）は 15 年間ハノーファーで過ごした後、2 か月前に韓国に戻った。しかし彼はまだ、私たちの囲碁グループに強く結び付きを感じており、例えば私たちのクラブトーナメントにちょうど参加しているところである。もちろんインターネットを通じて。もし彼がブンデスリーグでもハノーファーのために参加することができれば、私は個人的には素晴らしいと思う。³⁹

そのうえで彼は「いくつかの他のチームの計画」、つまり自らの地域とのつながりを持たない外国人をチームに入れるという計画が、スポーツマンシップにかなうものかを疑問視した⁴⁰。そしてこの討論は 2004 年 9 月 26 日、ベルベンの「ディアーナ・クレーセギは私にと

³⁶ Ebd., Bernd Gramlich, 20.09.2004 07:03.

³⁷ Ebd., Tobias Berben, 20.09.2004 11:17. 東京に住むプレーヤーとは、第 11 期日本アマ最強戦で 2 位となった浅井英樹のことであり、同日 15 時 27 分、ディックフォートが次のように述べている。「既に浅井英樹が、私たちのために数回対局することを表明した。[…] 確かに浅井英樹は少し前から再び日本にいるが、きっとボン及びその周辺地域以外でも、まだ非常に有名であり好まれている。そして彼はまだドイツ碁連盟の構成員でもある。」Vgl. Ebd., FJ, 20.09.2004 15:27.

³⁸ Ebd., Maligar, 20.09.2004 11:23.

³⁹ Ebd., Christoph Gerlach, 20.09.2004 13:59.

⁴⁰ Ebd.

って無条件に好感の持てる人物だが、彼女はトリーアと何の関係があるのか」⁴¹という発言によりいよいよ具体的なものとなり、同日 10 時 44 分、さらに次のように続いた：

ディアーナ・クーセギで 1 人、そしてローラン・ハイザーでおそらく 2 人のドイツに住んでいない者がトリーアのために「ブンデスリーガ」に参加することに、私の批判はとりわけ向けられていた。この両者はトリーアと何の関係があるのか。[...] これらのプレーヤーたちに、おそらくこの地への何らかの関連があるべきだろう。それどころか私の考えでは住居が最も好ましい。そうでなければなぜブンデスリーガという名称なのだ。⁴²

ベルベンは同日 14 時 2 分、トリーアとは関係がないという理由から、ハイザーとクーセギがブンデスリーガに参加することを再度批判した⁴³。しかし大会規則の起草者コッホは、ブンデスリーガへの参加申し込みが残り 3 週間で締め切られるという時期にシステムを変更することなどできないと主張した。彼にとって「この時点でのリーグシステムについての新たな討論は意味がない」ことであった⁴⁴。

このように自らが作成した規則の草案に固執するコッホに対して、反対派の意見は次第に熱を帯びてくるが、2004 年 9 月 27 日、当初外国人の参加に賛成意見を述べていたグラムリッヒが妥協案を示した。彼によると「地域をいくらかより広く解釈するケルンのゴドルフの提案」、つまり浅井英樹の出場は悪くなく、ハイザーの参加も喜ばしいが、クーセギの件は「いくらかより扱いにくい問題」であった⁴⁵。そしてこの意見を受け、前日までハイザーの受け入れをも拒む立場だったベルベンも同日 18 時 30 分、次のように述べたのである：

ゴドルフチームは（浅井英樹を自らのチームのために出場させるつもりがない限りは）1 つの地域からなっており、それどころかプレーヤーたちは皆 1 つの州連盟に属している。トリーアの場合、私はローランをこの地域のプレーヤーとして受け入れる気があ

⁴¹ Ebd., Tobias Berben, 26.09.2004 02:18. ディアーナ・クーセギ (Diana Kőszegi) はハンガリー出身の囲碁プレーヤーで、2008 年に韓国棋院のプロ棋士となった。

⁴² Ebd., Tobias Berben, 26.09.2004 10:44. これに対して同日 13 時 16 分、「ディアーナによって真のヨーロッパ囲碁スターがこのリーグにもたらされること」を期待する意見も投稿された。Vgl. Ebd., newbie, 26.09.2004 13:16. ローラン・ハイザー (Laurent Heiser) はルクセンブルクの囲碁プレーヤーであり、世界アマチュア囲碁選手権にルクセンブルク代表として複数回出場している。

⁴³ Ebd., Tobias Berben, 26.09.2004 14:02. このようなベルベンの意見に対して、例えば同日 21 時 9 分、ペア・カネンギーサー (Per Kannengießler) が賛同し「どの外国人チーム構成員にもドイツのクラブへの明確な関連が不可欠だと私は思う」と述べた。「その限りにおいて、少なくともディアーナ・クーセギの指名には至急説明が必要だと思われる」というのが彼の考えであった。Vgl. Ebd., Chefsalat, 26.09.2004 21:09.

⁴⁴ Ebd., Maligar, 26.09.2004 23:09.

⁴⁵ Ebd., Bernd Gramlich, 27.09.2004 17:44.

る。少なくとも数十年間、彼はこの地域で囲碁を打っている。しかしディアーナをドイツブンデスリーガに受け入れることはできないと私は思う。彼女はトリーアとは全く何も関係がない。⁴⁶

このように、討論は全体として妥協点を見出す方向に動き始めた。そのことは2004年9月28日のアーレント・バイアー (Arend Bayer) の次のような意見にも示されている：

あるクラブに明らかに関係のある外国人プレーヤーがそのチームに参加しても何も反対はないという印象を、私たちは以前の討論からの合意として得ていた。[...] 英樹はここにいた1年半足らずの間に、おそらくたいいていの人が10年でやるより多くのことをボンとその周辺地域の囲碁のために行った。いずれにせよ彼は私にとってボンの囲碁に属しており、ここにいるその他の皆もそのように見ているだろう。その点では、ハノーファーのチェに [...] 差異はないと私は思う。⁴⁷

このように外国人プレーヤーの参加資格が1つの大きな論点となったのであるが、それに並行してライブ決勝ラウンドも、このスレッドにおけるもう1つの大きな論点となっていた。このスレッドの開始当初の討論においては、「誤って、今既に予定が詰まっているプレーヤーたちのみからチームを構成しないよう、理想を言えば、最終的な申込期限の前に、2005年の決勝ラウンドの期日が既に確定されているべきだ」⁴⁸とスファンテ・フォン・エリヒゼン (Svante von Erichsen) が主張したように、対面対局による決勝ラウンドは開催されることが前提とされていた。そして2004年9月21日、コッホはオフライン決勝ラウンドがなければ参加しないチームもあるだろうという論拠により、その実施の方針に変更がないことを告げた⁴⁹。

ところが同日2時59分、全ラウンドがインターネットで行われることで問題を抱えるチームよりも、ライブ決勝ラウンドに向けて、割り当てられた数のプレーヤーを集められるかどうかを悩むチームのほうが多くあるとゲツツェが発言した⁵⁰。さらに同日8時13分には、ゲルラッハが「決勝ラウンドがなければ評価は最も筋が通ったものとなると思う」⁵¹と述べ、リーグでの対局結果のみからの最終順位の決定を希望する立場を表明した。2004年

⁴⁶ Ebd., Tobias Berben, 27.09.2004 18:30.

⁴⁷ Ebd., Arend Bayer, 28.09.2004 02:52. バイアーの意見に続き、同日9時56分、バルベンも次のように、各チームが1人の外国人プレーヤーを任意の基盤に配置してよいという方向でさらなる妥協案を示した。「ローランは外国人プレーヤーとして [...] OKであり、ディアーナがブンデスリーガに参加するつもりなら、他のチームを探さなくてはならないだろう。しかしハノーファーのチェと同様、英樹もOKだろう。」 Vgl. Ebd., Tobias Berben, 28.09.2004 09:56.

⁴⁸ Ebd., Harleqin, 31.08.2004 03:28.

⁴⁹ Ebd., Maligar, 21.09.2004 02:43.

⁵⁰ Ebd., Michael Goetze, 21.09.2004 02:59.

⁵¹ Ebd., Christoph Gerlach, 21.09.2004 08:13.

9月27日にはベルベンも、ドイツの囲碁トッププレーヤーたちの観点から次のように主張した：

ライブ決勝ラウンドについて：重要な国内の大会、それどころか場合によっては国際大会に参加するドイツのトッププレーヤーたちの負担を考慮するよう、私はマリガーに請う。全てアマチュアとしてだ！ここで意見を書いているほぼ全ての強いプレーヤーたちがライブ決勝ラウンドに反対しているのは、不思議なことではない。⁵²

しかし2004年9月28日、コッホは「決勝ラウンドが現在の形式で行われるがゆえにくつかのチームが承諾したということ、私は指摘する」と述べ、ライブ決勝ラウンド反対派の意見を受け入れようとしなかった。彼は「何人かのプレーヤーたちがスケジュールを設定しやすくなるよう、決勝ラウンドは4月30日／5月1日に確定される」とし、あくまでライブ決勝ラウンドに固執したのである⁵³。このようなコッホの頑なな態度に対して、同日16時10分、ベルベンはそれまでにフォーラム上で行われた次のようなアンケートの結果をコッホに突きつけた：

ライブ決勝ラウンドに関するアンケートにおいては、これまでに次のように回答された。

- ・はい、私はプレイオフ式のライブ決勝ラウンドに賛成。…5票（13%）
- ・はい、私は計画されている形式のライブ決勝ラウンドに賛成。…9票（24%）
- ・いいえ、私はライブ決勝ラウンドに反対。…18票（48%）
- ・私にはどうでもよい。…5票（13%）

つまり、賛成しているのは37%のみであり、比較多数の48%が反対している！

外国からの参加に関するアンケートにおいては、これまでに次のように回答された。

- ・はい。…9票（25%）
- ・いいえ。…5票（13%）
- ・制限付きで。…21票（58%）
- ・どうでもよい。…1票（2%）

つまり、明確な絶対多数の58%が制限を設けることに賛成している。

考えられる制限についてのアンケートにおいては、これまでに次のように回答された。

- ・外国人プレーヤー0人。…5票（16%）
- ・外国人プレーヤー1人、ただし第1基盤には配置しない。…3票（10%）

⁵² Ebd., Tobias Berben, 27.09.2004 18:30.

⁵³ Ebd., Maligar, 28.09.2004 14:59.

- ・外国人プレーヤー 1 人、どの基盤に配置してもよい。…13 票 (43%)
- ・外国人プレーヤー 2 人、ただし第 1 基盤には配置しない。…0 票 (0%)
- ・外国人プレーヤー 2 人、ただし第 1 及び第 2 基盤には配置しない。…1 票 (3%)
- ・外国人プレーヤー 2 人、どの基盤に配置してもよい。…3 票 (10%)
- ・好きなだけ多く。…3 票 (10%)
- ・私にはどうでもよい。…2 票 (6%)

つまり「外国人プレーヤー 1 人、どの基盤に配置してもよい。」への賛成が明確な多数である。⁵⁴

このようなアンケートの結果から、ベルベンはライブ決勝ラウンドと外国人規制という 2 点において、再び規則の変更を求めたのである。ところがこのベルベンの投稿と同日同時刻、コッホは 2004 年 5 月 26 日にゲツツェによって開始されたアンケートの結果を盾に、自らの正当性を主張した。このアンケートでは、2004 年 9 月 28 日の時点で投票者の 42%が「チームは特定の都市／地域を代表するべきだが、誰が実際に参加するかについては大目に見るべき」という回答を選択しており、コッホの主張にとっては都合の良い結果だったのである⁵⁵。

出口の見えない討論が続けられる中、「決勝ラウンドが現在の形式で行われるがゆえにくつかのチームが承諾した」という上述のコッホの主張も疑問視され始めた。2004 年 9 月 28 日、まずゲルラッハが、続いてペア・カネンギーサー (Per Kannengießler) が、そのような主張をしているのはいったいどのチームなのかとコッホに問いかけた⁵⁶。しかしコッホは具体的な回答をせず、翌日にはゲルラッハが再度、どのチームがライブ決勝ラウンドなし

⁵⁴ Ebd., Tobias Berben, 28.09.2004 16:10. ベルベンの投稿において省略された、それぞれの回答に対する質問は次の通り。「ブンデスリーガを開催する場合、君はライブ決勝ラウンドに賛成か反対か。」「外国で生活している／外国に住んでいるプレーヤーたちは、ブンデスリーガに参加可能であるべきか。」「君たちが何とか受け入れることのできる『外国人規制』はどのようなものか。」Vgl. <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=973.0>, *Go-Bundesliga mit oder ohne Live-Endrunde?*, Tobias Berben, 21.09.2004 19:31; <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=990.0>, *Go-Bundesliga und Teilnehmer aus dem Ausland*, Tobias Berben, 26.09.2004 16:05; <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=994.0>, *Umfrage LegionärInnenregelung*, Dirk Battenfeld, 27.09.2004 22:02.

⁵⁵ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=912.0> (420), *Go-Bundesliga - eure Fragen werden hier beantwortet...*, Maligar, 28.09.2004 16:10. このアンケート結果は注 30 に掲載してあるが、2004 年 9 月 28 日の時点では投票数 40 であり、その後さらに投票があったため、コッホが引用した数値と注 30 に掲載したアンケート結果の数値には違いがある。また、上述の通り、このアンケートはコッホの主張にとって都合の良い結果となっているが、なぜこのような結果になったのかについて、カネンギーサーが次のような意見を述べている。「もちろん私もこのアンケートには『大目に見るべき』に投票しただろう。しかしそれはまさに、この言葉の表現がどのようなチーム構成を認めると言っているのか、私に不明確だったからである。」Vgl. Ebd., Chefsalat, 28.09.2004 18:42.

⁵⁶ Ebd., Christoph Gerlach, 28.09.2004 16:18; Ebd., Chefsalat, 28.09.2004 18:42.

のブンデスリーガを拒否しているのかを説明するようコッホに迫った⁵⁷。この状況においてシュティアスニーが登場し、妥協案⁵⁸を提示したが、ドイツ碁連盟会長クラフトが下した決断は次のようなものであった：

まだ計画が開始されてもいないことを、このインターネットフォーラムでしつこく説得するべきではないだろうと私は思う。トッププレーヤーたちも姿を現すよう、決勝ラウンドは何かを提供しなくてはならないということが私にはわかっている。しかし、まずはやってみよう。囲碁は人々の出会いを促進するべきだと、私は個人的に思う。それはインターネットでは制限付きでしかできない。⁵⁹

このようにして、ブンデスリーガはライブ決勝ラウンドを開催するという基本方針のまま、開幕へ向かうこととなった。

3. 決勝ラウンドの行方

開幕直前まで激しい討論が続いたものの、カネンギーサーが2004年11月4日に作成した「第1ブンデスリーガ 第1対局日、期日、結果」⁶⁰というスレッドから、無事に第1ブンデスリーガが開幕したことを確認できる。また同様に、「第2ブンデスリーガ A、第1対局日：期日、結果」⁶¹、「第2ブンデスリーガ B、期日、結果」⁶²においては、第2ブンデスリーガの開幕を確認できる。これらのスレッドにおける報告で注目すべきは、第1ブンデスリーガにおいてゴドルフの代表として浅井が出場していたことである。また、「第1ブンデスリーガ — しかしいつ?!？」からは、ハノーファー1の代表としてチェ・ヨンイルが出

⁵⁷ Ebd., Christoph Gerlach, 29.09.2004 12:40.

⁵⁸ シュティアスニーは、次のようにブンデスリーガとは別の優勝杯争奪戦の導入を提案した。「A) ブンデスリーガは私たちの専門事務局長によって考案された通りに、しかしインターネットのみにおいて、しっかりした地域規定と各チーム1人の招待プレーヤーで実施される。B) 優勝杯争奪戦は2005年4月30日/5月1日に週末の対面式大会として実施される。この大会には第1及び第2リーグでの順位に従い、8チームが参加資格を与えられる。[...]各チームはブンデスリーガの順位に従い、優勝杯に参加する意思があるか『問われる』。」Vgl. Ebd., Martin Stiassny, 29.09.2004 19:18.

⁵⁹ Ebd., kraft, 30.09.2004 09:30. この時点での結論ともいべきクラフトの投稿の後も、このスレッドでの討論はさらにしばらく続くこととなった。というのも2004年10月6日、外国人参加規制の討論における渦中の人物であるルクセンブルクのハイザーが遅れて討論に加わったからである。しかし、彼がブンデスリーガへの参加を決心した理由等を説明したうえで告げたのは、スレッドでの討論を受けての参加辞退であった。Vgl. Ebd., Laurent Heiser, 6.10.2004 23:27.

⁶⁰ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1072.0> (20), *1. Bundesliga 1. Spieltag Termine, Ergebnisse*, Chefsalat, 4.11.2004 15:48.

⁶¹ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1075.0> (40), *2.A. Bundesliga, 1. Spieltag: Termine, Ergebnisse*, Harlequin, 4.11.2004 18:09.

⁶² <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1081.0>, *2.B. Bundesliga, Termine, Ergebnisse*, Martin Stiassny, 5.11.2004 01:27.

場していたことを確認できる⁶³。2004年9月28日にはコッホが「ベルンハルト・クラフトとの意見交換後、招待プレーヤー規制の点において大会規則ができるだけ早く変更される」⁶⁴という投稿をしており、おそらくこれらのプレーヤーたちの参加を許容する規則が定められたと思われる⁶⁵。一方、トリーアの代表メンバーにクーセギとハイザーの名は含まれていなかった。

「第1ブンデスリーガ — しかしいつ?!?!」における報告を見る限りでは、その後も問題なくリーガ対局は進行したようである。しかし2005年2月、再びフォーラムでの討論が再開されることとなった。2005年2月11日、「幹部通達 2005年2月」がフォーラムに掲載され、同年6月18日にライプツィヒで代表者会議を行うことが周知され、同時に次のようなブンデスリーガ決勝ラウンドに関する計画が公表されたのである：

ライプツィヒにおける6月18/19日のブンデスリーガ決勝ラウンド

決勝ラウンドについてのより正確なことを、私はまだここで書くことができない。[...]初夏の大会計画には残念ながらゆとりがほとんどない。それゆえ代表者会議と決勝ラウンドを同じ週末に開催することが計画されている。ベルリンからライプツィヒに場所を移したことで、今や代表者たちも2、3ラウンドに参加することができるようになってきている。[...] 決勝ラウンドが、今のところまだ比較的強いプレーヤーたちの多くの支持を得ていないことを私は知っている。私たちはこの催しが魅力的なものになるよう尽力する。スタープレーヤーたちをライブで見たいというブンデスリーガファンが多くいるのである。⁶⁶

この通達に対して2005年2月12日、まずベルベンが反対意見を述べた。彼は決勝ラウンドのために遠隔地に旅行しなくてはならない点、及び役員たちが代表者会議に出席するか、自らのチームの対局に参加するかを選択しなくてはならない点を批判したのである⁶⁷。幹部通達とそれに対するベルベンの投稿から明らかなのは、この時点に至るまで、既に何度

⁶³ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1142.0> (40), *1. Bundesliga - aber wann?!?*, Arend Bayer, 22.03.2005 22:46; Ebd., Arend Bayer, 25.03.2005 21:51.

⁶⁴ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=912.0> (420), *Go-Bundesliga - eure Fragen werden hier beantwortet...*, Maligar, 28.09.2004 18:40.

⁶⁵ 今回、コッホによって起草されたブンデスリーガ大会規則の草案を確認することはできなかった。しかし外国人規制について、彼の草案において特に規定はなかっただろうことがゲルラッハの次の投稿から推測される。「ブンデスリーガ創設の際に、そもそもチーム編成の規定が必要とは誰も考えなかった。大部分の者たちが地域的な関連を当然の前提としていたのだ。そのため、この考えを個別事例において浸透させなくてはならないということのショックは、あちこちで大きかった。もし自動的に合意があるのでなければ [...] 合意を共有しない、あるいはまた理解しない者たちによっても合意が守られるよう、規則を定めることがおそらく避けられない。」Vgl. Ebd., Christoph Gerlach, 8.10.2004 11:55.

⁶⁶ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1304.0> (20), *Vorstandsroundschreiben Februar 2005*, DGoB-Vorstand, 11.02.2005 22:16.

⁶⁷ Ebd., Tobias Berben, 12.02.2005 11:41.

もライブ決勝ラウンドの実施に対する反対意見が投げかけられてきたにもかかわらず、それを実施する方針に変更はなかったということである。そして、スケジュールが過密であるという理由から、代表者会議と同じ日に決勝ラウンドが計画されてしまったのである。

このような状況において2005年2月17日、シュティアスニーが自らの考えを提示した。彼は降格決定ラウンドに組み込まれるであろうチーム、ハノーファー1を例として挙げ、6月18/19日にゲルラッハが出場を断念することに反対した。そして同時にゲルラッハが参加しない代表者会議も想像できないと述べた上で、次のように提案したのである：

公正さという理由からどのような選択肢があるのか。[…]：

- a) ブンデスリーガ決勝ラウンドと代表者会議を異なる週末に行う。
- b) 2005年のブンデスリーガ決勝ラウンドを取りやめる。[…]
- c) ブンデスリーガ参加チームのうち[…]資格を与えられたチームのための大会を、代表者会議と並行して2日間で行う。マイスターシャフトやブンデスリーガの昇格及び降格とは関係ない。[…]

遅くとも今、ブンデスリーガ決勝ラウンド2005を行うか行わないかについての討論が再開されるべきだと私は思う。⁶⁸

シュティアスニーのこの提案を受け、ライブ決勝ラウンドについての討論が再燃した。中心となったのは決勝ラウンドに反対する声で、同日のコルビンガーやベルベン等の投稿に続き、翌日にはユルゲン・ブロイアー（Jürgen Breuer）が次のように発言した：

決勝ラウンドに関して、私は討論の経過の中でブンデスリーガ決勝ラウンドに賛成を表明した2チーム（チームリーダー）を思い出すことができる。それはデュッセルドルフとトリーアだった。デュッセルドルフはどちらかといえば賛成、トリーアは無条件に賛成であった。他の討論参加者たちは皆、懐疑的であるか反対であった。それゆえ、組織者たちと幹部が私たちに本当に「底辺に同調する」よう強要するつもりなのか、私は知りたい。⁶⁹

このように反対の声が投げかけられた結果、2005年2月19日、連盟会長のクラフトはとうとう対面対局での決勝ラウンドを断念する旨を明らかにしたのだった：

ブンデスリーガのいわゆる「オフライン」決勝ラウンドは行われまいだろう。この種の催しに対する批判的な声がこのところ増加した。トッププレーヤーたちの対局という要求を満たす参加者数が実現するか疑わしい。説得力のある決勝ラウンドのコンセプト

⁶⁸ Ebd., Martin Stiassny, 17.02.2005 14:17.

⁶⁹ Ebd., Jürgen Breuer, 18.02.2005 12:47.

トを提出することも、残念ながら私たちにはできなかった。既に決勝ラウンドの計画に力を注いだ全ての人々に私はお詫びしたい。リーガマイスターをどのようにして確定するか [...] という問いが残されている。⁷⁰

クラフトのこの投稿を受け、ベルベンは 2005 年 2 月 20 日、「ブンデスリーガ決勝ラウンドは取りやめられたが、次はどうする？」というスレッドを新たに開始した。彼はライブ決勝ラウンドの取りやめを「正しい決断」と評価したうえで、「必要ないとは思いますが、もし 9 ラウンドの総当たり戦の後にさらに何かを開催するつもりなら、上位 4 チームが準決勝及び決勝を戦うべきだろう」⁷¹と提案した。ベルベンはここで明言していないが、討論の流れから、彼の提案はオンラインで行う決勝戦と捉えて間違いない。このようなベルベンの「必要ないとは思いますが」という前提付きの意見に対して、決勝戦を断固求める意見も出され⁷²、その主張にシュティアスニーも賛同し、2005 年 2 月 23 日、第 1 リーガのマイスターと第 1 リーガへの昇格チームを KGS でプレイオフ式決勝ラウンドで決めることを提案した。彼はこの対局を特別なものとするために、決勝ラウンドを韓国のプロ棋士にライブでコメントしてもらうことも提案している⁷³。

このように、「次はどうする？」というベルベンの問いに応答する意見も投稿されたが、このスレッドは全体として、オフライン決勝ラウンドの取りやめという幹部の決定に対する各人の思いが投げかけられる場となった。そもそもライブ決勝ラウンド反対派が多数であったため、その取りやめに賛同する意見が多く述べられたのだが、中にはこの決定に不満を抱く者たちもいた⁷⁴。2005 年 2 月 20 日、「多くのブンデスリーガ参加者に私は直接会い

⁷⁰ Ebd., kraft, 19.02.2005 20:49. 2005 年 2 月 24 日、コッホはオフライン決勝ラウンドの取りやめに至った経過を次のように述べている。「代表者会議の期日がブンデスリーガ決勝ラウンドの期日に重ねられた際に、問題が生じた。[...] それから私たちは、少なくとも全体を 1 か所で開催するよう試みた。しかしこの解決策にも大きな問題があった。決勝ラウンドを取りやめるという困難な決断を、私は 1 人で引き受けたくなかった。私は幹部の決定を支持することをベルンハルトに宣言した。翌日、幹部の決定は決勝ラウンドに反対ということになった。」Vgl. <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1320.0> (40), *Online/Offline Endrunde · Votum der Mannschaftsführer 1./2. Liga*, Maligar, 24.02.2005 15:14.

⁷¹ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1318.0> (120), *BL-Endrunde abgesagt, was nun?*, Tobias Berben, 20.02.2005 10:08.

⁷² 同日 21 時 27 分、次のような意見が投稿された。「ブンデスリーガのホームページに次のように述べられている。『それに続いて上位 4 チームそして下位 6 チームがまとめられる。これらのグループが週末にベルリンでリーガマイスターあるいは降格する 2 チームをかけて対局する。[...]』したがってマイスターになるチャンス、あるいは第 2 リーガの場合には昇格するチャンスを、今更 2 位から 4 位にいるチームから奪うことはできない。」Vgl. Ebd., Cal, 20.02.2005 21:27.

⁷³ Ebd., Martin Stiassny, 23.02.2005 14:00.

⁷⁴ とりわけその誠実さゆえにブンデスリーガに参加することを断念した、ノルトライン＝ヴェストファーレン州連盟会長のアンドレアス・フェッケ (Andreas Fecke) にとって、このような成り行きは到底受け入れることができなかった。彼は次のように述べている。「私と他のパデルボルの人々にはブンデスリーガ参加への関心があった。しかし決勝ラウンドが計画されていて、ブンデスリーガの申し込み締め切り時には、その開催地も開催時期も不明だろうと私が述べ

たかった」という声がトリーアから投げかけられ、この投稿においては、第1ブンデスリーガ及び第2ブンデスリーガに参加している全26チームのうち、「本当に少なくとも14チームが決勝ラウンドに反対を表明したとは、私は依然として思わない」⁷⁵として、ライブ決勝ラウンドの廃止が批判された。そして「オンライン/オフライン決勝ラウンド — 第1/第2リーグのチームリーダーの投票」という新たなスレッドが、次のような書き込みによって開始された：

大多数のチームが決勝ラウンドに反対しているということが、繰り返し（証拠なしで）話題となっているので、第1及び第2ブンデスリーガのどのチームが明白に決勝ラウンドに反対しているのかは（ひょっとすると私にとってだけではなく）興味を引くだろう。もしこれが大多数（26チーム中14チーム）であれば、幹部による取りやめは本質的により理解可能となるだろう。それゆえ上述のチームに、チーム名と共に各1票をこのスレッドに願う。⁷⁶

この要望に従い、チームリーダーたちはこのスレッドにおいて、自らのチームがライブ決勝ラウンドの実施に賛成か反対かを明らかにしていった。そして2005年2月22日、シュティアスニーが投票の中間状況をまとめた。この段階では26チーム中14チームが投票を済ませており、11チームが決勝ラウンドに反対、3チームが決勝ラウンドに賛成という状況であった⁷⁷。その後さらに1チームが反対、1チームが賛成した2005年2月23日の時点で、トリーアから次のような意見が投げかけられた：

ここで [...] 投票したのが全てのチームリーダーでないことは残念だ。相対的な像はいくらか訴える力があるが、私が考えていた通り、実際に特別な多数がブンデスリーガ決勝ラウンドに反対である／あったということではない。[...] このスレッドを紙屑籠に入れ、今シーズンの締めくくりあるいは来シーズンの対局規則のためのアイデアを探ろう。⁷⁸

た際、この決勝ラウンドへの参加を約束しようとする者はほんのわずかであった。それゆえ私は参加という考えを捨てるしかなかった。なぜなら公示に予定されている決勝ラウンドに向けてチームを結成することができるだろうと私が確信できない限りは、私たちは良心から参加することができなかったからである。決勝ラウンドの取りやめは私の耳には次のように聞こえる。催しの公示をまじめに受け取り、それに従って自らの行動を方向付けることは間違っている。催しの規則を守らないという固い意志をもってその催しに参加することは正しい。」 Ebd., ferdi, 20.02.2005 20:14.

⁷⁵ Ebd., TR, 20.02.2005 22:56. この投稿、そして注76、78の投稿には、個人ではなくトリーアチームのアカウントが用いられており、投稿者名は記載されていない。

⁷⁶ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1320.0> (40), *Online/Offline Endrunde - Votum der Mannschaftsführer 1./2. Liga*, TR, 20.02.2005 23:12.

⁷⁷ Ebd., Martin Stiassny, 22.02.2005 10:33.

⁷⁸ Ebd., TR, 23.02.2005 21:50.

確かに残りの 10 チームが投票をしていない状況ではあった。しかし、決勝ラウンド反対派が多数であることが明らかであるにもかかわらず、その結果から目をそらそうとする態度に対して、2005 年 2 月 24 日、ベルベンは「地球は 1 枚の板だ！」という皮肉で投稿を開始した。彼はこのアンケートによって 3 分の 2 がライブ決勝ラウンドに反対、3 分の 1 のみが賛成という割合が明らかに示されている点を指摘し、「真実を無視する」姿勢を批判したのである⁷⁹。

このようにライブ決勝ラウンド賛成派の不満、そしてその不満に対する反対派の不満を孕みながら、ブンデスリーガはオンライン決勝ラウンドで幕を閉じる方向に動くこととなった⁸⁰。「第 1 ブンデスリーガ — しかしいつ? ! ?」におけるその後の投稿にも、オンライン決勝ラウンドの実施を前提とした発言が見られる⁸¹。

ところが事態は思わぬ展開を迎えることとなり、まず『ドイツ基新聞』2005 年第 3 号に、ブンデスリーガのオンライン決勝ラウンドについて次のような記事が掲載された：

第 1 ブンデスリーガの 2005 年決勝ラウンドは 6 月 23 日及び 7 月 7 日に、棋聖堂基サーバーにおいて行われる。6 月 23 日、まず準決勝においてカールスルーエがフランクフルトと、ゴドルフ（ノルトライン＝ヴェストファーレン）がハンブルクと対戦する。それから 7 月 7 日に両勝者が決勝を行う。シーズン後に 2 位に位置付けられたチーム「ベルリン・オストヴィント」はリーグ後の決勝ラウンドへの参加を取りやめた。長いシーズン後にこのようにして勝者を確定する形式に抗議するためである。共に参加を取りやめるチームはなかったが、決勝ラウンドへの拒絶は広く分かち合われたので、既にドイツ基連盟は反応を示し、来シーズンの決勝ラウンドを廃止した。⁸²

このように、インターネット上での決勝ラウンドさえも初年度のブンデスリーガのみのイベントとなったことがまず公示された。そして決勝ラウンドの予定日間近の 2005 年 6 月 20 日、事態はさらなる展開を迎えた。ベルリン・オストヴィントの不参加に続き、この日の 0 時 45 分、カールスルーエのペーター・フォン・シュタッケルベルク（Peter von Stackelberg）が決勝ラウンドへの不参加をその理由と共にスレッド上で告知したのである：

⁷⁹ Ebd., Tobias Berben, 24.02.2005 11:15.

⁸⁰ 対面式の決勝ラウンドを断念するものの、少なくともオンラインでそれを実施することはこの時点でのコッホの願望でもあった。彼はライブ決勝ラウンドの取りやめについて述べた際、併せて次のように述べている。「対局規則は昇格及び降格の調整のために決勝ラウンドを予定している。私は引き続きこれを支持し、実施するよう試みる。幹部がこれを決議によって妨げないよう私は望む。開催の場は KGS だろう。」Vgl. <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1318.0> (120), *BL-Endrunde abgesagt, was nun?*, Maligar, 24.02.2005 15:09.

⁸¹ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1142.0> (40), *1. Bundesliga - aber wann?!?*, Bernd Gramlich, 8.04.2005 13:56.

⁸² Tobias Berben: *Go-Bundesliga 2004/2005*. In: *Deutsche Go-Zeitung* (2005), Heft3, S.23.

第1に、大会としての決勝ラウンドの取りやめ。直接碁盤で対局が行われないのなら、決勝ラウンドそれ自体がひやかashiである。なぜなら私たちは既にインターネットでは互いに対局したのだから。それから、インターネットでの決勝ラウンドのために公示された最初の期日の取りやめ。[...]最後に、マイスターのタイトルさえも与えられない。[...]マイスターシャフトがないなら、もちろん決勝戦もあり得ない。もしそれがまだ計画されているのなら、それはいずれにせよカールスルーエなしで行われる。⁸³

ここで述べられた不参加の理由のうち、「マイスターのタイトルさえも与えられない」とは、一体どういうことなのか。それは同日 10 時 27 分のアンドレアス・フェッケ (Andreas Fecke) の投稿に読み取ることができる。彼の投稿によると、「ドイツ碁連盟はドイツチーム碁マイスターシャフトを開催しない」ということがかつて議決されていた⁸⁴。しかし今回、ライブツィヒでの代表者会議に、この決議を廃止する申請が提出された。そしてこの会議では、「ブンデスリーガ 2004/5 の勝利チームに『ドイツチームマイスター』のタイトルを与えること」も提案された。ところが、「とりわけそのようなことをさかのぼる形で議決するべきではないだろうという理由から、それは否決された」のであった⁸⁵。

上述の通り、マイスターのタイトルを獲得できないことはカールスルーエから決勝ラウンド参加へのモチベーションを奪った。そして、このカールスルーエの決勝ラウンド不参加表明がまた、他のチームのモチベーション低下を引き起こしたことが、2005 年 6 月 25 日のベルベンの投稿からわかるのである：

タイトルを与えないという代表者会議の決断後、カールスルーエが決勝ラウンドへの参加を取りやめた。その後ハンブルク 1 と、私の知る限りではフランクフルトも、リーグの 1 位と 2 位のチームが参加しないなら、決勝ラウンドへの参加にもはや意義を見出せないということを明らかにした。⁸⁶

このような事態となった結果、スレッド上でのカールスルーエの不参加表明から 1 日も経過しないうちに、新たなブンデスリーガ専門事務局長のシュティアスニーは「第 1 ブンデ

⁸³ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1563.0> (20), *Absage Bundesliga Endrunde*, KA76139, 20.06.2005 00:45.

⁸⁴ この点に関してグラムリッヒが次のように述べている。「私たちは [...] 有効な 2001 年の決議をまだ手にしており、それによるとハンディキャップなしのチームマイスターシャフトは開催されてはならない。ドイツにはまともな棋力の地域チームがあまりにもわずかしが存在し得ない [...] ということが、当時、この決議の理由であった。」Vgl., <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=912.0> (420), *Go-Bundesliga - eure Fragen werden hier beantwortet...*, Bernd Gramlich, 27.09.2004 17:44.

⁸⁵ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1563.0> (20), *Absage Bundesliga Endrunde*, ferdi, 20.06.2005 10:27.

⁸⁶ Ebd., Tobias Berben, 25.06.2005 09:37.

スリーガのトップに位置するチームのために定められたプレイオフラウンドは、関連するチームリーダーたちとの協議により取りやめられた⁸⁷と告げることとなった。その結果、ブンデスリーガ初年度の勝利チームは第1ブンデスリーガのリーグ対局の結果からカールスルーエとなり、2005年6月23日、カールスルーエに属するプレーヤーが次のような投稿でスレッドを開始した：

2005年6月21日。ブンデスリーガ決勝ラウンドの取りやめ。資格を与えられたさらなる1チームが決勝ラウンドへの参加を取りやめた後、ブンデスリーガ専門事務局長は他のチームリーダーたちと申し合わせをしたうえで、決勝ラウンドを完全に取りやめた。これにより、リーグでの結果が2004/2005年の第1シーズンの公式最終結果となり、ブンデスリーガの勝者はカールスルーエである。本当におめでとう！⁸⁸

この投稿は笑顔を表す絵文字で締めくくられた。しかし、投稿者は初年度のブンデスリーガの最終的な経過に不満を抱えていた。翌日2時44分、投稿者はブンデスリーガの初シーズンにマイスターの称号が与えられない件について「それは私たちにとって不公平だ」と述べ、そのせいで「ずっと機嫌が悪い」と主張しているのである⁸⁹。しかし、これに対して同日6時52分、オルガ・シルバー (Olga Silber) が「それなら、2位から4位のチームにとって不公平であるということも言えないだろうか」と反論を展開した。これらのチームは上位4チームに入ればタイトル獲得へのチャンスがあると考えていたのだから、というのがその理由であった。⁹⁰

このような討論のさなか、同日10時12分、バッテンフェルトが次のような根本的な問いを投げかけた：

このタイトルとはそもそも何を表しているのか。その保持者がブンデスリーガで[...] 勝利したということである。カールスルーエは勝利を取めたではないか。あるいは来年、ドイツ碁連盟はこの名誉の上にさらに何かを加えるのか。[...] ユーロだろうか。あるいはブンデスリーガの歴史叙述を [...] 2006年に開始し、布告によって2005年を歴史から削除することで、カールスルーエの成果を高く認めることが完全に拒まれるべきなのか。あるいはそこには次のように書かれるのか：

⁸⁷ Ebd., Martin Stiassny, 20.06.2005 14:36.

⁸⁸ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1576.0> (60), *Karlsruhe*, KA76139, 23.06.2005 20:41. この投稿は、ドイツ碁連盟ホームページのニュース (Nachrichten) に掲載された記事のコピーであったことが、ディックフートとクリスティアン・ヴェンツェル (Christian Wenzel) の投稿からわかる。Vgl. Ebd., FJ, 23.06.2005 22:36; Ebd., Christian Wenzel, 24.06.2005 00:07. また、連盟ホームページのニュース文書館 (Nachrichtenarchiv) においてこのニュースを確認することができる。Vgl. <http://www.dgob.de/>

⁸⁹ Ebd., KA76139, 24.06.2005 02:44.

⁹⁰ Ebd., Olga Silber, 24.06.2005 06:52.

2005年：第1回ドイツ基ブンデスリーガの勝利チーム：カールスルーエ

2006年：ドイツ基ブンデスリーガの初代タイトル保持チーム：XY

2007年：2代目 …⁹¹

ブンデスリーガで勝利を取めたにもかかわらずカールスルーエにタイトルが与えられないという事態を、バッテンフェルトが好ましくないと捉えていたことはこの発言から明らかである。本稿冒頭において引用した、「歴史家たちがこのフォーラムに保管されている文書を掘り進むなら、まず彼らの驚きがどれほど大きいだろうか」という彼の危惧は、このような事態の中で発せられたものだったのである。

おわりに

冒頭で述べた通り、本稿ではドイツ現代囲碁史研究の開始点として、ドイツ基ブンデスリーガ初年度の経過を辿ることを試みた。初年度のブンデスリーガにおいて大きな論点となったのは、決勝ラウンドの開催と外国人プレーヤーの参加規制であった。決勝ラウンドに関しては、まず対面対局での実施が取りやめられ、続いてインターネット上での実施も初年度のみでの催しとすることが決定され、最終的には初年度におけるインターネット上での開催も取りやめられた。外国人プレーヤーの参加規制に関しては、参加申し込みをした外国人プレーヤーたちの多くを許容する方向に動いたようであり、さらにシーズンが終盤を迎える中で形成されたブンデスリーガ委員会⁹²によってチーム編成に関する新規則が提案され、これがその後の代表者会議において議決された⁹³。2005年6月30日に作成された「ブンデスリーガ大会新規則」というスレッドには、チーム編成について次のように述べられている：

最小で5人、最大で10人のプレーヤーが1チームに所属する。最大2人を除くチームの全プレーヤーが申し込み期限時に、ドイツ碁連盟の州連盟構成員でなくてはならない。チームは地域のために対局するのだが、全プレーヤーに関して、そのチームにどのような個人的関連があるのか、申し込みの際に告げられなくてはならない。地域的関連のないプレーヤーの受け入れは、チームに最大1人とすることが勧められる。⁹⁴

⁹¹ Ebd., Dirk Battenfeld, 24.06.2005 10:12.

⁹² この委員会はバイアー、グラムリッヒ、コッホ、シュティアスニー、カネンギーサーによって構成されていた。Vgl., <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1142.0> (40), *1. Bundesliga - aber wann!?*, Martin Stiassny, 15.04.2005 12:16. また、2005年4月15日には既に翌シーズンのための新規則について具体的な討論が行われていたことが、グラムリッヒの投稿からわかる。Vgl. Ebd., Bernd Gramlich, 15.04.2005 10:49.

⁹³ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1563.0> (20), *Absage Bundesliga Endrunde*, Martin Stiassny, 20.06.2005 14:36; Ebd., Arend Bayer, 20.06.2005 15:38.

⁹⁴ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1595.0>, *Die neue Spielordnung Bundesliga*, DGoB-Vorstand, 30.06.2005 12:09.

このように初年度の実施期間中、あるいはその終了後に様々な変更・修正が加えられ、ブンデスリーガは第2シーズンを迎えることになった。その後の経過を辿ることが、本研究の主要な課題の1つである。ただし、この課題に取り組む前に、ブンデスリーガ初年度の経過を概観する過程で生じた疑問を解明することが必要である。それは、ライブ決勝ラウンドに反対する声が賛成する声よりも明らかに多かったにもかかわらず、連盟会長のクラフトがその実施に賛成する立場を取り続けたのはなぜかという疑問である。本稿第2章の最後に引用した彼の発言から読み取れるように、クラフトは囲碁によって人々の出会いが促進されるべきで、インターネットではそれを十分には実現できないと考えていた。ライブ決勝ラウンド賛成の立場に彼をとどまらせた理由の1つは、この主張に示されている。

さらに、遠隔地から訪れて参加する価値のある特別な催しとして決勝ラウンドを提供することは不可能ではない、という彼の構想もまた、クラフトがライブ決勝ラウンドの実施を簡単にはあきらめなかったもう1つの理由として挙げることができる。彼はフォーラムでの討論において、ライブ決勝ラウンドに反対する声の方が多いこと、そして普段は対面対局を好むプレーヤーたちであっても、現状ではライブ決勝ラウンドにそれほど興味を示さないだろうことを十分把握していた⁹⁵。そのような状況においてさえ、ライブ決勝ラウンド実施の方針を曲げようとしなかったということは、魅力的なライブ決勝ラウンドを実施できるという、彼の確信の強さを示していると捉えることができる。

それでは、クラフトはプレーヤーたちが喜んで参加するライブ決勝ラウンドをなぜ実施できると考えたのだろうか。そこには当時、ドイツ囲碁界が発展の兆しを見せていたという状況があり、「ドイツ囲碁史研究(1)」でも指摘した通り、クラフトがこの状況を好機と捉えていたことを、彼自身の発言にも読み取ることができる：

ドイツの囲碁プレーヤーたちの中に台頭の機運のようなものがあると私は断言した。何かを組織する準備のある人々が多くいる。ベルリンのハンス・ピーチュ・メモリアルにおいて先週末、このことを最もよく確認することができた。そこでは類まれな催しを創設することが成功した。大人の囲碁プレーヤーたちのためにも何か素敵なことを開催する機会を、なぜ私たちが利用しないだろうか。⁹⁶

「大人の囲碁プレーヤーたちのためにも何か素敵なことを開催する機会」とは、まさにブンデスリーガのことである。新たに開始された子供たちのための大会であるハンス・ピーチュ・メモリアルに続き、ブンデスリーガが素晴らしい催しとなることを、クラフトは確信していたのであろう。それほどまでに当時、ドイツの囲碁界は好況を迎えていたのである。

そしてここに至り、さらなる問いが生じる。そもそもドイツ囲碁界に好況が訪れることに

⁹⁵ <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=912.0> (420), *Go-Bundesliga - eure Fragen werden hier beantwortet...*, kraft, 1.10.2004 12:06.

⁹⁶ Ebd.

なったきっかけは何であったのか、という問いである。次稿においては、ブンデスリーガ開幕から数年を遡った時期のドイツ囲碁界の状況に焦点を当て、この問いに対する回答を示したい。

(北海道大学 非常勤講師)